

# 「株式会社 姫路シティFM21」

## 第 69 回 放送番組審議機関 審議会議事録

1. 開催日時 平成28年12月3日(土曜日) 午後1時30分～午後3時

2. 開催場所 イーグレひめじ地下2階 ミーティングルーム

### 3. 出席状況

1)委員総数 7名

2)出席委員数 5名

3)出席委員の氏名(敬称略、順不同)

大井 義雄 大谷 昭仁 大野 幸一 岩田 稔恵  
宮本 節子

4)欠席委員の氏名(敬称略、順不同)

岸田 直美 衣笠 愛之

5)会社側出席者氏名

寺尾 雅晴 (専務取締役 放送局長)

石本 康二 (常務取締役 営業部長)

小林 寛幸 (放送総務部編成制作担当)

### 4. 議題

#### 1)事務局説明

- ・ 放送局長より挨拶

#### 2)資料説明

- ① 平成28年10月～平成28年11月の取り組みについて
- ② 平成28年12月以降の取り組みについて
- ③ その他

#### 3)試聴

- ① 大学生が防災ラジオ始めました(2016年11月29日 12:30～13:00放送分より)
- ② GENKI防災研究所 すきまの防災「災害時の行動心理」  
(2016年11月3日 12:00～12:15放送分)
- ③ GENKI防災研究所 ママの防災あれこれチャレンジ「携帯トイレ」  
(2016年10月16日 15:45～16:00放送分)

#### 4)意見交換

- A 委員 災害時のトイレ問題は大きな課題だ。震災の応援に行ったときでも、大変困難だった。最近では電気吸引式のトイレもあり、その場合はバケツに水があっても流れない。また下水道もトイレの水だけになった場合は流れなくなる可能性が高い。
- B 委員 電気が止まれば水もとまる。自治会単位の防災倉庫に発電機もあるが、出力が小さいので、大人数には対処できない。非常用電源を確保するという事は、多くの場所における課題である。
- C 委員 避難所の環境整備も徐々に前進している。
- B 委員 南海東南海地震が来た場合は、浜手にも被害が出る恐れがある。その場合は、電力等の供給にも影響があるはずだ。
- A 委員 姫路にも津波が来る予想がある。
- 副委員長 防災番組について、制作費はだれが負担しているのか？
- 事務局 「大学生が防災ラジオ始めました」は完成品を納品してもらっている。「GENKI防災研究所シリーズ」は自社負担である。
- 副委員長 試聴の②と③は非常によくできている。特に良いと思うのが「防災リーダーをとりました」ということを「何人取りました」と言うだけではなく、「GENKI防災研究所」を作って、リスナーに届けるというコンセプトが良い。語っている津雲さん、杉山さんのしゃべりもよい。講義を聴いて、トピックを選定して伝えるという能力が素晴らしい。この番組は継続するのか？
- 事務局 「防災リーダー講座」の振り返りが終わった後は「気象」を予定している。「気象」を学ぶために、二人は現在、神戸まで学校に通っている。「雲はなぜできるのか？」など、気象と防災について語ってもらう予定。
- 副委員長 「サイエンスコミュニケーター」という制度があるが、まさにそれをラジオで実践している。専門家の講義内容は高度なものが多いが、それをわかり易く伝えるということは技術である。「すきまの防災」は聴いた後、とても心に残った。「緊急時は左側を歩く」「普段できないことは、いざという時できない」と、メッセージが記憶に残る。「ママの防災」も継続して欲しい。
- 事務局 「ママの防災」は2016年1月から放送している。これまでに「非常食の試食」や「非常用発電機の操作」など、実践的なテーマを取り上げている。
- 副委員長 番組を後日ネットで聴けるようにしてほしい。15分だけで終わらせるのはもったいない。ママの視点というのはとても良い。
- 事務局 私も知らない視点だ。
- 委員長 防災の意識を常に持ち続けることが大切。リスナーにイメージが届き、自己トレーニングできる内容なので継続して欲しい。
- 副委員長 防災は「エピソード」が大切。講演会は男の人があれこれ話すケースが多いが、実際、男性は働きに行ってしまうと、日中の地元にはお年寄りや子供、女性しか残っていない。
- 副委員長 スポンサーを探すことができないのか？
- 放送局長 とくに「すきまの防災」などは正面から防災に取り組んでいるので、理解をしていただける会社であれば可能性があるかもしれない。
- 副委員長 ぜひ取り組んでいただきたい。「GENKI防災研究所」というネーミングが良い。

委員長 インフラがなくなって、自分たちでどうしようか？ということを出演者が考えるという設定がよい。

B 委員 テーマが明確で、筋書きがはっきりしているからわかり易い。理論だけではないところが良い。「すきまの防災」でも真理を突いている。

A 委員 「ダラダラでも良いので防災訓練は必要」ということは理解できる。とりあえずやり続けることに意味がある。「GENKI防災研究所シリーズ」が大切にしないといけない。

委員長 毎週でも良い。

A 委員 群集心理の説明など、2人の説明が大変よく分かった。リーダーの必要性がよく分かった。

C 委員 防災訓練でアルファ化米の炊き出し訓練をしている。みんなで作るということが、どんどん広がればよい。

A 委員 しつこいほどやるほうが良い。面白いことをたくさん言っていた。

B 委員 企画が良い。

副委員長 トイレ問題だけでもシリーズができる。ネットにもあげていただきたい。

事務局 「ママの防災」は本当に実演しているので、画面があっても良いかもしれない。

C 委員 最終的には「飲む・食べる・出す」というところが重要。

事務局 当社も地下の2階にあり、女性が多い職場なのでトイレ問題は大きな課題。数百回分のキットは用意しているが、実際はどうなるかわからない。

C 委員 地下にあるが、浸水害は大丈夫なのか？

事務局 計画では問題ないことになっているが、可能性がゼロではない。

委員長 「地震なら地下が安全だ」「水害なら地下は危険だ」と言われるが、その判断がすぐにつくように啓発が必要。

C 委員 ラジオからも的確に情報を流していただく必要がある。

B 委員 姫路市は「市川の洪水」と「山崎断層帯地震」が懸念される。その時に、市民が混乱しないように、FMゲンキは的確な初動対応を行う必要がある。

副委員長 災害対応に必要なのは人手である。年末年始の対応にも言えることだが、責任ある対応を行うには正社員等であることが必要だと考える。放送業務は非正規雇用が中心と聞いているが大丈夫なのか。

放送局長 世の中の方向性としては、正社員化に流れて行っているのは確かだ。当社の規模にあった内容を考える必要がある。

委員長 緊急時の放送はどのような体制で行っているのか？

事務局 年末年始については社員に担当日を割り振っている。しかし、放送担当社員は放送しないといけないという意識を持っていると思うが、部署が変わればその覚悟が低くなる可能性もあり、日常から放送業務を行っていないため、対応できない可能性もある。一昨年の事例では、外出中の私の携帯電話に連絡があり、そこからスタッフを割り当てて対応した。放送社員は3人であるため、まずはこの人数で回す必要がある。

大谷委員長 緊急時の第一報はどのように入るのか？

事務局 正規ルートは担当部署から放送局長に連絡が入る。予備のルートとして、危機管理室等の担当職員は私の会社用携帯電話番号を把握しているため、担

当職員から連絡が入ることもある。

放送局長

この事例では、2系統で連絡があった。

副委員長

少ない人数ではなかなか大変だと思うが。

放送局長

仕組みとしてはFMゲンキの許可のもと、防災センターから放送することも可能である。この事例では、1回放送を行った。

副委員長

責任を持てる人の数を確保しておくべきだ。

放送局長

姫路市としては、市民に対する情報発信ツールを複数確保するという方針があり、その中の一つとしてFMゲンキも入っている。

委員長

先日の地震でも携帯電話が鳴った。

副委員長

福島出張中に携帯電話が鳴ったが、「鳴ったけどどうする？」という状態だった。あわてると、やはりテレビをつけるかラジオをつけるかになる。

放送局長

インフラが大打撃を受けた時はラジオが重要な役割を果たす。過去の災害でも実証されている。

副委員長

地方では車に乗っている人も多いので、スマートフォンは見ることができない。少ない人数で大変かと思うが、しっかり対応してほしい。

委員長

あらかじめレベルに応じた対応方針を決めておいた方が良い。

放送局長

震度等に応じた対応は行っている。最終的には動ける人間が対応せざるを得ない。今年は、非常用発電機を稼働させて、放送機器に接続するという訓練を実施した。大変な訓練だった。

B 委員

初期対応が一番重要だ。信頼にかかわる。

A 委員

FMゲンキの出発点は防災と聞いている。姫路市の危機管理室もがんばってやっている。

放送局長

危機管理室職員・消防局職員もラジオに出演するコーナーをもって、日ごろから市民に対して放送する訓練を行っている。

事務局

先日の地震については、人員がそろっている時間帯であったため、スムーズに対応できた。通常は2から3名で1つの番組を担当しているが、金曜日の午後には、放送中のスタッフ、次の番組のスタッフ、社員・役員も多くそろっていた。しかし資料にもあるとおり、放送スタッフは非正規雇用が中心であり、ライフスタイルの変化等により、退職する者もいる。昨今の情勢の中では、採用が困難になりつつもある。特に早朝のスタッフは本来3名体制のところ、2名で運用している曜日もあり、地震の発生などを受けてスタッフ内でも不安が広がっている。番組制作をマスターして、防災業務もマスターしてとなれば、やはり数年の経験が必要になってくる。

B 委員

非常時のスキルアップは絶対に必要。人の動きをしっかりと考えて、業務に当たってほしい。

A 委員

停電時の対策ということも必要。電波さえ生きていたら、何とかなる。

放送局長

館内のバックアップもあるが、限界はある。

副委員長

災害対策としての人員強化が必要だ。

事務局

中間部分の業務に対応できる人員が少ない。例えば停電を例に挙げると、「番組を放送するスタッフ」はいるが、「停電を復旧させる人員」が少ない。今回の訓練で、常勤役員も対応できるようになったはずだが、人が変われば、再度

育成が必要。

副委員長 人手の問題は大きい。大学でも正規職員が減っているので、厳しい面が増えている。防災は要である。

B 委員 災害はどうしようもない状況の時に限って発生する。

事務局 今回の地震は平日の日中だったので人員もそろっていたが、早朝5時や夜9時等の場合は、大変厳しい。

【事業報告等に関する意見】

午後3時、以上の報告・討議・検討を終了し、閉会した。

公表年月日 平成28年12月7日

公表内容 審議の概要

公表方法 事務所据え置き、ホームページ(<http://fmgenki.jp>)

自社放送内「FMゲンキからのお知らせ(平成28年12月11日午後5時10分)」

以上